

帯広市

鄭自豪

1 歴史

1.1 帯広の幕開け

蝦夷地(北海道)には既に先住民のアイヌの人々が、独自の文化を築いていた。1869 年、蝦夷地は北海道と改称され、十勝国(現在のほぼ十勝支庁域)を創設。帯広の前身の河西郡下帯広村が誕生した。1886 年に北海道庁が設置され、停滞していた開拓に大きな息吹が与えられた。

1.2 殖民

1888 年には、道庁殖民課の内田瀨（きよし）と柳本通義（やなぎもと みちよし）ら一行は、十勝国の約 7 万 ha の農耕適地を殖民地として選定した。

その時の『北海道殖民地撰定報文』では、後年帯広市が育つウエカリップ原野について「此ノ地、将来ニ於テ運輸ノ便、生産ノ富、位置ノ宜（ヨロ）シキヲ有ス。只、部落ヲナスニ止マラズシテ百貨輻輳（フクソウ）ノ一大市場ヲ為スモ、亦知ルベカラズ」と記して、早くも今日あることを予見している。

1.3 帯広「市」となる

1933 年 4 月、帯広は、札幌、旭川・室蘭、小樽、釧路に次ぎ北海道で 7 番目の市として誕生した。人口は、約 3 万 2 千人であった。市章は 1933 年 4 月 1 日に制定した。市章は両側に北海道の「北」の字と、オビヒロの「ヒ」の字をかねて表し、下に「ロ」を、中央には十勝の中心都市として飛躍を続ける帯広市を表徴して「オ」の字を図案化している。

図 1 帯広市章



出所：帯広市 HP

1.4 川西村・大正村との合併

帯広市と近接地域との合併については古くから動きがあり、面積の狭い帯広市としては懸案の一つでもあった。川西村、大正村と帯広市の合併については、1950 年に始まる川西村稲田地区住民の帯広市編入運動が導火線の役目を果たした。一進一退を繰り返していた時、吉村博が 1955 年に公選制 2 人目の市長に当選、翌年 9 月に川西村は全村合併を議決し、さらに 1957 年には大正村も合併を議決した。かくて、1957 年 3 月、川西、大正両村と帯広市の合併が内閣告示され、同年 4 月 1 日人口約 10 万人の帯広市が出現した。

1.5 平成時代

1989 年前後からは、西帯広方面の戸数、人口が急増し、小、中学校が相次いで新設された。1992 年には、市民待望の市役所新庁舎がオープン、この年に開基 110 年、制施行 60 年の記念式典も執り行われた。

また、その前後に道立帯広美術館やとかちプラザ、業技術センター・国際センター、の交流館などが開館、さらには緑ヶ丘の野球場に代わった帯広の森野球場、ショッピングセンターに代わる市民プールなども新設された。

1996 年には、懸案の JR 高架が開通、新帯広駅がオープンし、駅前改造事業も進展して装いを一新した。また、1999 年から翌年にかけて、柏林台北町団地の 10 階建て 1～4 号棟（260 戸）が完成、市内の諸施設などが一層充実した。

2 地理

2.1 地名の由来

アイヌ語の「オペレペレケプ」（川尻がいくつも裂けている）が転訛した「オベリベリ」に由来している。

2.2 地位と地形

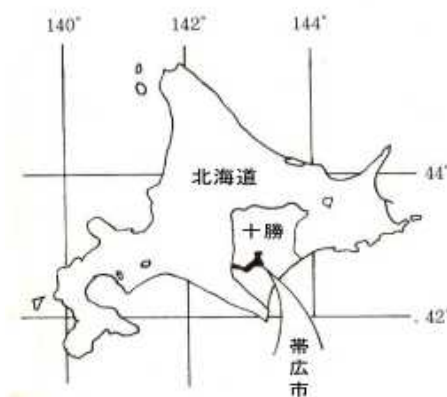
(N42°55', E143°11')北緯 42 度 55 分 16.99 秒東経 143 度 11 分 59.96 秒。面積は 618.94 平方 km (東京 23 区とほぼ同じ)で、南西部は十勝幌尻岳 1,846m

など日高山脈が占め、市域の 1 割が「日高山脈襟裳国定公園」に指定されている。また、山地から札内[さつない]川、帯広川、戸蔭別[とったべつ]川などが流れ出ており、札内川の水は水道水の原水として利用している。一方、市域の約 6 割を占める中央部、北東部の平地は、その約半分が農地であり、全国でも有数の大規模経営の畑作地帯になっている。市街地は市域の北東端に位置し、全国 6 位の流域面積の十勝川や札内川に隣接している。

2.3 気候

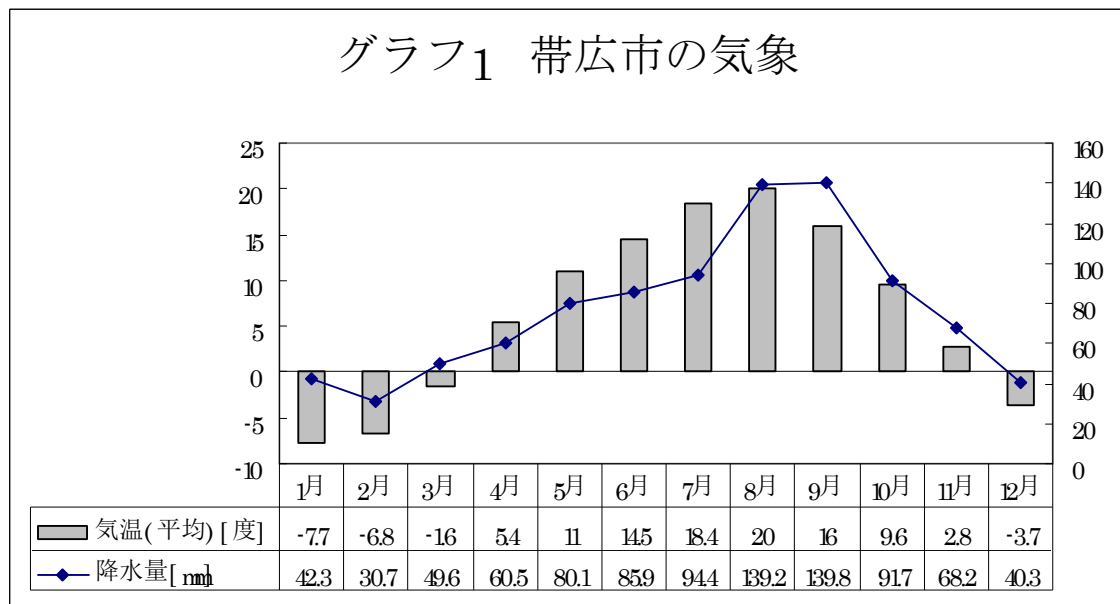
年平均気温が 6.5 度、年間降水量が約 900mm、年間の 1mm 以上の降雨日が約 85 日と日本では冷涼少雨の地域である。内陸部に位置するため、1 日の気温差が比較的大きく、1 日の最高気温と最低気温の差は平均 10.5 度。夏季の晴天の日は 30 度を超える日(※平年値 10.5 日、2007 年 15 日)もあるが、そのような日も朝晩は 15～18 度まで下がる。冬は北海道内でも最低気温が下がりやすい地域であり、最低気温が氷点下になる「冬日」は平年値で年間 161 日あり、厳寒期には氷点下 20 度前後まで下がる。最高気温が氷点下の「真冬日」は、平年値で年間 58 日がある。

図 2 帯広市の位置



出所：帯広市 HP

グラフ1 帯広市の気象



出所：気象庁 HP

3 帯広市の都市計画

3.1 都市計画とは

都市計画は、土地の使い方や建物の建て方についてのルールをはじめ、まちづくりに必要なことについて総合的、一体的に定め、まちづくり全体を秩序立てて進めていくことを目的にした計画である。

3.2 平成帯広市のまちづくり

1988年に連続立体交差事業に着手し、1996年には鉄道高架の供用が開始された。これにより鉄道で分断されていた南北の土地利用が一体化し、道路網が整備されるなど利便性が高まるとともに、駅周辺土地区画整理事業などの実施により、帯広十勝の中心市街地として、都市機能の充実に向けた駅周辺の都市開発を推進してきた。また、札幌市、釧路市、北見市につながる北海道横断自動車道が、1995年に十勝清水～池田間、2003年には池田～本別、足寄間が開通した。2011年10月21日には、トマム～十勝清水間の約21kmが開通し、道内最大級の交通の難所と呼ばれる日勝峠を回避できることとなり、道央圏との往来がより一層安全で便利なものとなり、夕張までの全線開通が近づいている。更に、広尾町の十勝港に至る帯広～広尾自動車も幸福まで30kmが開通するなど、利便性の高い高速道路ネットワークがすすめられている。住宅の開発では、1991年から新西帯広地区、1993年から南部地区の宅地開発が行われた。また、2003年からは環境に配慮した稲田川西地区の区画整理事業がすすめられている。このほか、1994年から、新たな工業団地として西20条北地区の造成が行われた。その後、帯広市みどりのまちづくり条例、帯広市環境基本条例を策定

するなど、人と自然が共生し、環境への負荷を抑えた循環型、環境保全型の環境共生都市をめざしてきている。

3.3 帯広市都市景観基本計画

帯広市では 1992 年に帯広市景観基本計画を策定し、帯広の魅力を高めるためのさまざまな試みを行ってきた。

帯広市の景観をその特性から 5 つに分類し、これを基本単位として景観形成を行うことにした。

「水と緑の景」とは大小の川の流れや、自然の樹林地、家の庭の樹木、公園の緑など、自然の要素は見る人々の心を穏やかにし、まちの中に存在する意義は大きいである。ここでは、その自然の要素がつくりだすまちのようすを『水と緑の景』と称し、捉えていくこととする。

「みちの景」とは道路の景観は大きく 3 つの側面から生み出されている。1 つめは沿道の土地利用し、橋や眺望点など、場所のもつ特徴による。2 つめは道路自体の機能や、幅員などの構造による。3 つめは沿道からの眺望やアイストップなど、他の景観要素との関係による。ここでは、その 3 の側面から生み出されるまちのようすを「みちの景」と称し、捉えていくこととする。

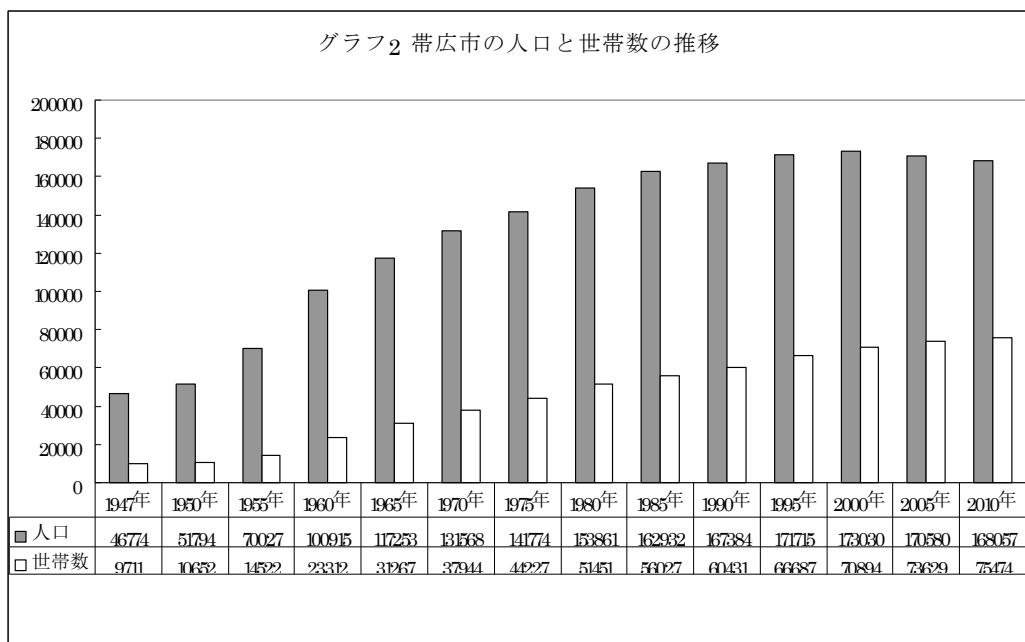
「まちの景」とは建物や道路を単体としてでなく集合として捉えることによって、まちを広がりで捉えることができ、「街並み」という見え方が意識される。ここでは、その広がり「まちの景」と称し、捉えていくこととする。

「時の景とは」まちの景観は常に同じ状態にあるのではなく、時間の経過とともに変化し、さまざまな表情をみせている。ここでは、その変化しているまちのようすを「時の景」と称し、帯広の景観を固定的なものではなく、変化するものとして捉えていくこととする。

「生活の景」とはまちの景観は、そこで人々の活動や生活行為が展開されることによって、活気、賑わい、人間の息づかいなどが加わり、一層魅力的になる。ここでは、その活気、賑わい、人間の息づかいなどによってつくられるまちのようすを「生活の景」と称し、捉えていくこととする。

4 人口と世帯数推移

帯広市の人口動態は、2001 年から減少に転じ、出生数から死亡数を引いた自然動態はかろうじてプラスを保っていますが、転入から転出を引いた社会動態は十勝支庁管外や道外への転出を中心に減少を続けている。転出先は、帯広圏 3 町、札幌市、首都圏が多くなっている。いままで以上に消費購買力低下や地域経済縮小が予想されることから、十勝支庁管外に市場拡大を図り、交流人口を増やしていくことが必要である。

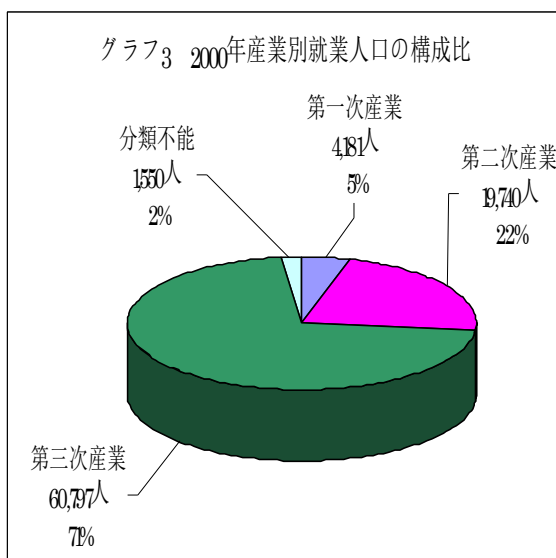


帯広市 HP をもとに筆者作成

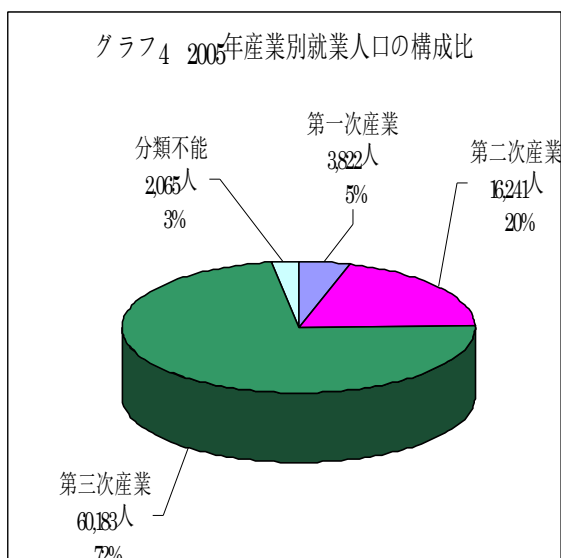
5 産業と産業別人口

5.1 産業別人口

2005 年国勢調査（グラフ 3）による本市の産業別就業人口は第一次産業が 4.6%、第二次産業が 19.7%、第三次産業が 73.1%であり、2000 年（グラフ 4）に比べ第二次産業が減り、第三次産業が増えている。本市は全国平均と比較すると第二次産業の割合が低く、第三次産業が高くなっているが、十勝管内は全国平均と比較して第一次産業の割合が高くなっている。



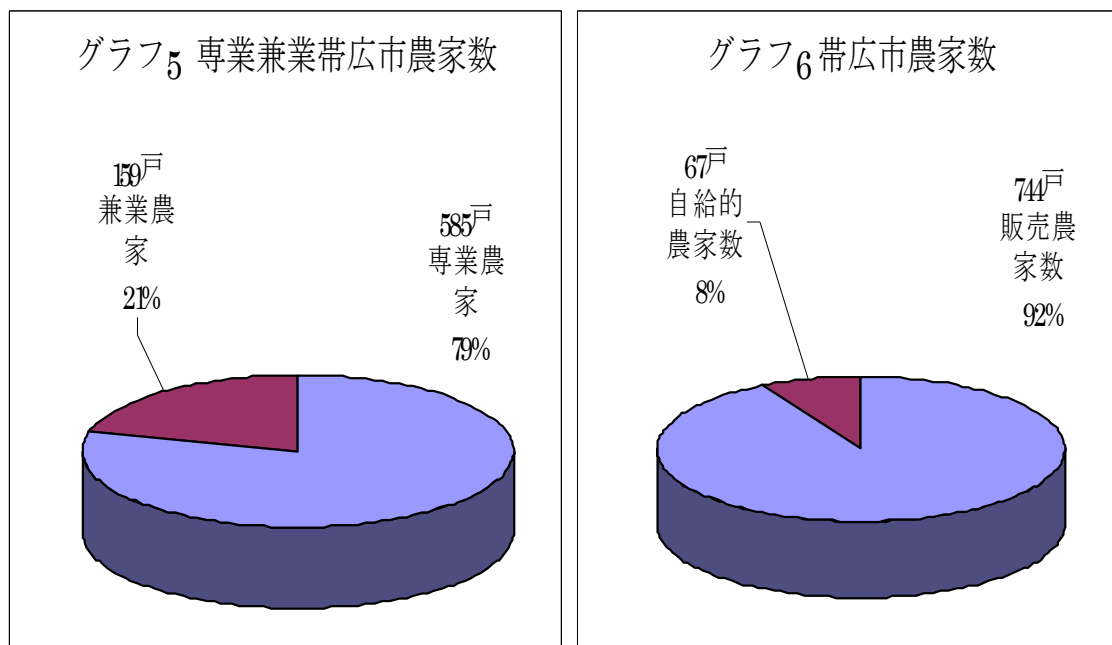
出所：帯広市 HP



出所：帯広市 HP

5.2 農業

帯広市の農家戸数は減少を続けているが、農業産出額は安定しており、農家1戸当たり生産性が向上してきている。経営耕地面積規模別の農家数は、規模の小さい農家が減少する傾向にあり、また、兼業農家が減少する傾向にある。



出所：帯広市 HP

出所：帯広市 HP

地域の基幹的作物である小麦、てん菜、豆類、馬鈴しょに加え、長いも、大根、グリーンアスパラガスなどの作物の導入にも力を入れている。平均経営耕地面積は 24.7ha(2005年農林業センサス)で、全道平均 17.7ha、全国平均 1.7ha を大きく上回る。

表 1 帯広市品別作付農家数と品目別作付面積

作物別作付	農家数(戸)	作付面積(ha)	作物別作付	農家数	作付面積
作付実農	689	17,457	豆類	524	2,493
麦類	573	6,505	野菜類	392	1,157
工芸農作物	486	3,613	いも類	481	3,341

出所：農林水産省 HP

大規模経営農業で全国有数の農業産出額。周辺の十勝地域と同様に、全国有数の農業地域である。小麦、てんさい(ビート)、じゃがいも、豆類、とうもろこし、野菜、乳牛、肉牛等を栽培、飼育しており、約 800 戸の農家で約 260 億円の農業産出額をあげている。

表 2 帯広市家畜の経営体数と飼養頭数(2005 年)

	乳用牛	豚	肉用牛
家畜の経営体数	100	4	12
飼養頭数	8,255	6,760	1,491

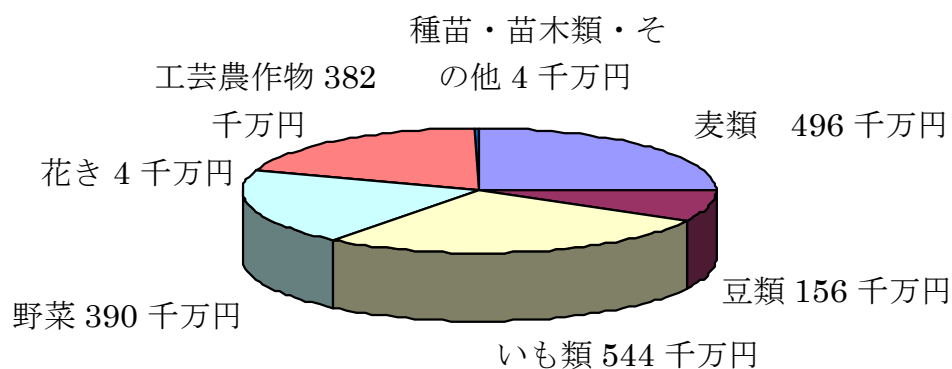
出所：農林水産省 HP

表 3 農業産出額(2006 年生産農業所得統計)

花き	4 千万円	肉用牛	205 千万円
麦類	496 千万円	乳用牛	376 千万円
野菜	390 千万円	うち生乳	316 千万円
豆類	156 千万円	豚	46 千万円
いも類	544 千万円	その他	4 千万円
合計	2,60 千万円	工芸農作物	382 千万円
耕種計	1,976 千万円	畜産計	634 千万円

出所：農林水産省 HP

グラフ 7 帯広市農業産出額



出所：農林水産省 HP

5.3 工業

表 5 工業事業所数と従業員数と製造品出荷額

年	事業所数	従業員数	製造品出荷額
2008 年	147 件 (前年比 0.7%減)	5,076 人 (前年比 4.2%減)	約 1,215 億円 (前年比 1.9%増)
2007 年	148 件 (前年比 2.0%減)	5,301 人 (前年比 3.8%増)	約 1,192 億円 (前年比 16.8%増)
2006 年	151 件 (前年比 6.2%減)	5,108 人 (前年比 2.4%増)	約 1,021 億円 (前年比 1.6%減)

出所：帯広市 HP

帯広市の工業は、基幹産業である農業を核とした食料品加工や地場資源を活用した地域に密着した製造業が中心となって発展してきた。

さらなる発展や活性化を促進するため、地場資源や技術、人材を有機的に結びつけながら「ものづくり」を基本とした地場産業の育成を図る。

事業所数（前年比 2.0%減）は減少したが、従業員数（同 3.8%増）、製造品出荷額等（同 16.8%増）は増加した。特に製造業出荷額等は前年に比べ約 172 億円（前年比 16.8%増）の増加で、全道でも、砂川市（前年比 17.5%）に次ぐ、2 番目の伸び率であった。

5.4 商業

都市機能が集積する十勝圏の中核都市、帯広市では、行政と地域とが協働で中心市街地の活性化、賑わいづくりに向けて取り組んでいる。

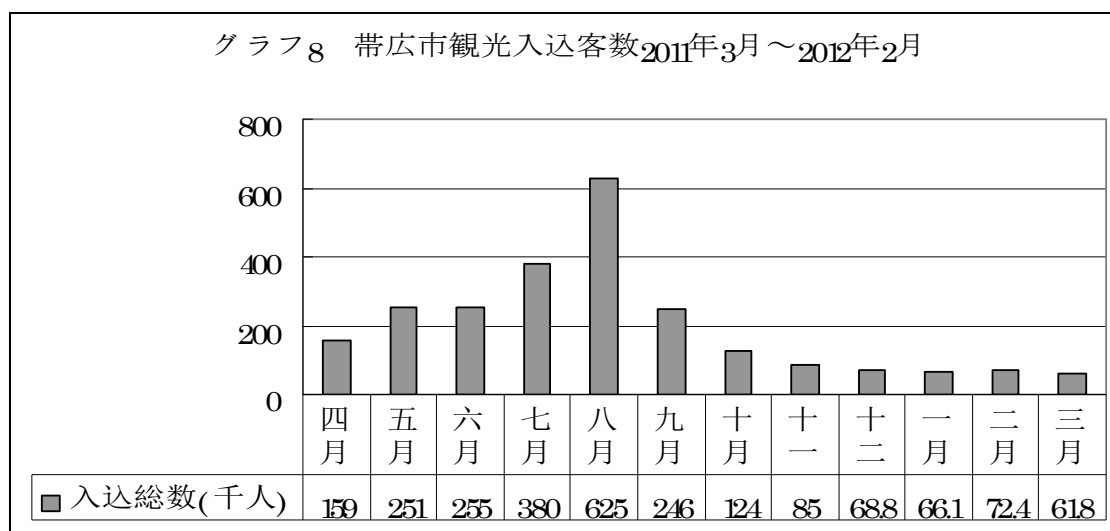
北海道広域商圈動向調査報告書 2010 年 2 月による 1 市 16 町 2 村（陸別町を除く十勝管内町村と日高管内えりも町）の商圈人口は、356,668 人である。

2007 年商業統計調査による帯広市内の小売業は、商店数は、529 件、従業員数は 12,594 人、売場面積は 305,266 m²、年間販売額は約 2,398 億円である。

6 観光と名産品

6.1 観光入込客数

帯広市の季節別の観光客数は、ラリージャパン（WRC）や 4 年に一度開催される国際農業機械展などの変動要因があり近年の増減が大きいものの、夏（6～9 月）が圧倒的に多い傾向にある。



出所：北海道十勝観光連盟 HP

6.2 観光名所

6.2.1 愛国駅と幸福駅

愛国駅と幸福駅は平成 20 年 7 月、「恋人の聖地」に選定された。「恋人の聖地」は NPO 法人地域活性化支援センターの「恋人の聖地プロジェクト」において、各地域を代表する観光施設、地域を中心に選定して、プロジェクトのシンボルである。

図 4 幸福駅



出所：帯広市 HP

6.2.2 世界で唯一のばんえい競馬

体重 1 トンを超える馬が重りをのせた鉄ソリを引いて直線コースで力とスピードを競う、世界でたったひとつのばんえい競馬。北海道開拓時代の農耕馬が現代のレースへ受け継がれ、今では北海道遺産として人々に感動を与えている。長年、帯広市を含む北海道内の自治体が共同で運営してきたが、2007 年度から帯広市が単独で運営している。

図 5 バンエイ競馬



出所：帯広市 HP

6.2.3 岩内自然の村

岩内自然の村は、雄大な自然の中での野外活動や集団生活などの各種活動を通じて、自然に親しみ、自然と人間とが共に生きていくことの大切さを学び、心身を鍛え、心のふれあいを深め、豊かな想

図 6 岩内自然の村ー仙峡橋



出所：帯広市 HP

像性を育む帯広市の社会教育施設である。野草樹木、野鳥、天体観察などの自然に親しむ活動、ハイキング・各種球技などの心身を鍛える活動、集団ゲーム、川遊びなどのレクリエーション活動、自炊、キャンプファイヤー・写生などの心を豊かにする活動、農業体験、清掃などの勤労奉仕活動、研修会などの活動ができる。

図 7 豚丼



出所：帯広市 HP

6.3 豚丼は帯広が発祥の地

地元では古くから親しまれている料理ですが、その味が今では全国的に有名になり、観光や出張で帯広に訪れる方たちは、一度は必ず食べて帰ると言われている。市内には多くの豚丼専門店があり、それらのお店を紹介した豚丼マップが発行されている。

6.4 帯広のスイーツ

北海道の中でも帯広はお菓子が美味しい街として知られている。各店が美味しいお菓子を多くの人たちに食べてもらおうと、知恵を絞りコスト削減に取り組んでいる結果、有名店のショートケーキが 100 円台の価格で買うことができる。買ったケーキやお菓子をその場で食べられるコーナーのある店や、お菓子屋さん直営のカフェレストランもある。

図 8 帯広のスイーツ



出所：帯広市 HP

6.5 その他

人口約 17 万人を有する十勝の中心都市帯広は、「とちかち帯広空港」「JR 帯広駅」など、十勝観光の拠点である。豊かな自然環境と快適な都市機能とが共生する田園都市で、「豚丼」発祥の地、「スイーツ」のまちとしても有名である。また、長野オリンピックの金メダリスト「清水宏保」選手はじめ、多くのスケート選手を産んだ、スピードスケートの盛んなまちである。

7 帯広畜産大学

帯広畜産大学は、1941 年に帯広高等獣医学校として創立し、1949 年に国立大学唯一の獣医農畜産系の単科大学として設立された。その後、畜産学、生命科学、食品科学などの

農業諸科学分野の増設，整備、再編を行い，1990 年および 1995 年には，それぞれ連合獣医学研究科博士課程（岐阜大学大学院）および連合農学研究科博士課程（岩手大学大学院）の構成大学となった。2006 年には，獣医領域および畜産領域の融合分野による基礎研究，応用研究，実践技術習得を目的とした「食の安全確保」に関する高度人材育成のため，全国で唯一「博士（畜産衛生学）」の学位を授与する畜産衛生学専攻博士課程を設置した。

< 参照ホームページ >

気象庁 HP : <http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>

北海道十勝観光連盟 HP: <http://www.tokachibare.jp/what/obihiro/index.html>

北海道十勝総合振興局 HP:

<http://www.tokachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/tss/move/toukei/index.htm>

帯広市 HP: <http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/kanko-index.jsp>

統計局国勢調査 HP: <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm>

農林水産省 HP: <http://www.maff.go.jp/>

北海道 HP: <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>

帯広畜産大学 HP: <http://www.obihiro.ac.jp/>